

キリスト教教育と私 (12)

塩野和夫

(1)

1977（昭和52）年4月に同志社大学神学研究科前期課程聖書神学専攻に進んだ。指導教授は旧約聖書神学の野本真也先生で、同期のゼミ生には山川君がいたり。

旧約聖書神学を専攻した理由は、詩篇第42・43篇への問いである。「絶対安静！」を指示され、東九条の下宿で寝ているしかなかった1975年夏にあの詩篇と出会い、深い感銘を受けた。それは私の人生に新たな展開さえもたらした。そうだとしたら、あの出会いはいったい何であったのか。神学部在学中にすでに詩篇研究を試みていた。神学部4年生の時には文学部で開講されている駒木先生による万葉集の講義も聴講し

-
- 1) 「図書カード」によると、1977年度に読んだ本は次の通りである。
 - i) 祈り・説教 J. ベイラー『朝の祈り・夜の祈り』、佐伯俊『天の父よ—私たちの祈祷集—』
 - ii) 組織神学 野呂芳男『ウエスレーの生涯と神学』、ティリッヒ『組織神学 第2巻』
 - iii) 聖書神学・実践神学 榊原康夫『旧約聖書の生い立ちと成立』、シュラッター『新約聖書注解1 マタイによる福音書』、小林公一『一般の教育とキリスト教教育』、福井達雨『僕たち、太陽があたらへん』、織田植治『チゲクン』、深田種嗣『陶工—深田種嗣牧師帰天20周年を記念して』、『同志社の思想家たち 下巻』、井上洋治『日本とイエスの顔』、榎本保郎『ちいろば』
 - iv) 宗教と社会 森岡清美『現代社会の民衆と宗教』、神島二郎『近代日本の精神構造』、唐木順三『日本人の心の歴史 上』、武田清子『土着と背教』、鹿野政直『日本近代化の思想』、梅原猛『塔』、吉川英治『親鸞』、内山興正『宿なし法句参』
 - v) 人生論 広瀬善順『こころの灯』、『続 こころの灯』、亀井勝一郎『青春論』、畑正憲『ムツゴロウの青春』、『ムツゴロウの結婚記』、遠藤周作『愛情セミナー』、石川達三『恋愛論・結婚論』、カント『道徳形而上学原論』、坂口安吾『墮落論』、倉田百三『愛と認識の出発』、『出家とその弟子』
 - vi) 絵本・児童文学 サン＝テグジュペリ『星の王子さま』、レオ＝レオニ『さかなはさかな』、『せかいいちおきなうち』、『あおくときいろちゃん』、松谷みよ子『龍の子太郎』、イ・ユンボギ『ユンボギの日記—あの空にも悲しみが—』

た。詩篇における個人の嘆きの歌と万葉集における挽歌の歌に注目し、日本人の感性と聖書の間観を比較し、その研究を通してあの時の出会いが解明できるのではないかと考えたからである。

野本真也先生から紹介いただいた Joachim Becker, *Wege der Psalmenexegese*. は、学部時代に目を通しカードも作っていた。しかしそれら一切は、大学院の聖書学研究演習Ⅱで本格的な詩篇研究を始めると、何の役にも立たなかった。先行研究をおさえるために、ドイツ語文献の的確な理解を求められたからである。Becker を前期で終えると、後期には Herman Gunkel, *Einleitung in die Psalmen.*, Claus Westermann, *Lob und Klage in den Psalmen.*, Koch, *Was ist Formgeschichte ?* の翻訳に取り組む。毎週のように提出するレポートは毎回真っ赤に添削されて却ってきた。詩篇と万葉集の比較研究は断念せざるをえなかった。ゼミを終えると、野本先生は喫茶店のわび介へと院生を誘い、コーヒーをご馳走くださった。3年目の松隈正徳さん、後期課程に進まれた渡辺孝治さん、組織神学を専攻していた畠山保男さん、それに山川君と塩野は野本先生を囲んで話に夢中になった。



わび介で野本ゼミ 1977年4月

聖書神学ではそれ以外に、聖書学研究Ⅱで野本先生の「創世記の研究」、聖書学研究Ⅳで橋本滋男先生の「新約聖書の本文と聖典」、聖書学研究演習Ⅲで遠藤彰先生の「共観福音書研究」を学んだ。キリスト教史ではキリスト教史研究演習Ⅰで土肥昭夫先生の「日本キリスト教史研究」、キリスト教史研究演習Ⅳで深田未来先生とラーン先生の「ウエスレー研究」を履修した。組織神学では組織神学研究Ⅰで土居真俊先生の「意味の神学」、組織神学研究Ⅱで緒方純雄先生の「救済論」を学んだ。さらにキリスト教化学研究Ⅳで深田先生の「礼拝学」を履修した。

それらの上に、樋口和彦先生から「教職科目を履修しておく、将来助けになるから」と勧められた。そこで教職科目の「同和教育の研究」、「道德教育の研究」、「宗教科教化教育法」、「教育心理学」を履修した。けれども、本来の研究に時間を割けないので、教職科目は途中で断念した。

*

大学院前期課程に進学して生じた大きな変化は学内における集会を継続しなかったことである。経済学部で在学した4年間は聖書研究会を主催し、ヨハネ福音書とマタイ福音書を学んだ。神学部に編入学すると、「イエスの言に聞く者の集い」を企画し、その後も「証しを聞く会」を続けた。だが、1977年春からは学内での集会を行わなかった。なぜなのか。

仲間の移動が第1の理由である。松隈正徳さんは春に日本キリスト教団天満教会の伝道師に就任した。大学院では修士論文の完成を残している。しかし、教会の仕事が忙しくなっていた。松隈隆子さんも生活の中心を天満教会に移していた。本行健三さんはお父様が入院され、この頃から京都と北海道を往復されるようになる。よるだん会の金澤君と服部君は春に大学を卒業していた。第2に健康状態がある。研究生活ができるまでに腎炎は回復していた。それでも月に1回は学生会館で検尿検査と診察を求められた。これらはしかし、神学部に編入学した時も同様であり、主な理由にはならない。そこで、第3の理由すなわち自意識の変化を根本的な根拠として挙げなければならない。神学部に編入学した際には、神学作業の中心に礼拝の必要を感じた。ところが、東九条における詩篇第42・43篇との出会いをきっかけにして、「御言の説きあかし」に新たな使命を感じるようになる²⁾。この使命感が要請していたのは、「御言の説きあかし」のための訓練だった。それで大学院に進学した4月に洛南教会の高杉

三四子牧師に夏期伝道師の希望を伝える。

高杉先生から電話をいただいたのは5月中旬だった。

高杉先生 塩野さんの希望を5月の役員会で諮りました。皆さん快く了解されて、6月から3か月間を洛南教会の夏期伝道師として招きます。その間、教会の諸集会に参加し、洛南幼稚園で1回、城陽市の家庭集会で1回、最後に教会の日曜礼拝で1回、奉仕をお願いします。

塩 野 早速にありがとうございます。香里教会の杉田牧師に伝えます。その上で、香里教会役員会の了承が必要になると思います。しばらく、お待ちください。

*

6月第1週の香里教会役員会で承認されたので、翌週から洛南教会の礼拝に出席を始める。夏期伝道師として臨んだ最初の礼拝後、夏期伝道師として紹介される。その後、書記の吉崎信一さん、会計の平居さん、幼稚園主任保母の宮川静枝先生が次々と挨拶に来られた。挨拶を終えると青年会の会員と食事を囲んだ。山田さん、天野さん、大村さんと馴染みのメンバーである。ただし、その場におられるはずの小原安喜子先生は足を骨折されて入院中のため欠席だった。夜の讚美歌練習も中止になった。青年が集まると、しぜんと信仰の話になる。大村さんの証しは核心を突いていて印象に残った。

信じるというのはどういうことなのか、疑問に思っていた。ところが、小原先生のお父さんである小原十三司先生とお会いして、「こういうことだったんだ！」と分かった。信じるというのは人間の生き方の根本にあるものやったんや。

6月最後の礼拝を終わると、平居さんが近寄って来られた。

平居さん 夏期伝道師、ご苦労様です。これは教会からの6月分の謝礼です。受け取ってください。

塩野 今月は礼拝に出席しているだけで、何の御用もしていません。謝礼など、恐縮です。

平居さん 仕事はこれからだんだんとしていただきます。役員会で決めたものから、受け取ってください。

塩野 それでは感謝して受け取らせていただきます。

6月の謝礼として3万円もいただいた。用途について考えた結果、そのお金をもって枚方市駅南口にあった三越デパートに行った。8月に説教を担当する礼拝で着るスーツを買うためである。店員が3万円ちょうどの夏物のスーツを勧めてくれたので、それを買った。

7月に入ると、高杉牧師から「7月下旬の夕方、教会堂の前庭に丸くなって座っている洛南幼稚園の子どもたちにお話をして下さい」と依頼された。教会学校の教師は7年目に入っていたが、担当したのはすべて中高生だった。小学校入学前の幼児にどのように話せばいいのか見当もつかない。それで宮川先生にお願いして保育中の園児を観察させてもらった。子どもたちは元気いっぱい動き回っている。その真ん中にいて、先生は注意したり、指導したり、お話をされている。イメージはできた。当日、円になって座っている園児と子ども讃美歌を歌い、聖書を読み、お祈りをした。それから、身振り手振りを交えて大きな声で語りかけた。

塩野 みんな、ローソクって知ってるか？

園児 知らん。

塩野 知ってる人？

数人 (手を挙げて) はーい。

塩野 ローソクってね、明るくて温かいんや。でも、なんであんなに明るくて温かいか、分かるか？

園児 (みんなが黙ったので) しーん！

塩野 ローソクは燃えるとだんだん短くなる。自分を燃やしているからや。ローソクが短くなるのを知ってる人、いるかな？



洛南幼稚園でのおはなし 1977年7月

数人（声だけ、あちらこちらから返ってきて）知ってる、知ってる。

塩野 ローソクは自分を燃やしながら、周りの人を照らし温めている。いいか、みんな！人間にもそういう人がいるんや。イエス様は「人を照らしたり、温める人が大切な人や」と教えたはる。そのことを覚えておいてください。今日のお話はこれでおしまいです。

8月に入ると、世光教会と洛南教会の合同で天幕伝道集会在が3日間行われた。1日目は映画会で、司会を任せられ「逃走」を上映した。2日目は荒木さん（世光）と平居さん（洛南）の証しに続き、世光教会の後宮俊夫牧師がヨハネ福音書4章13-14節をテキストにして説教された。3日目は高校生の井上君（世光）と吉崎さん（洛南）の証しの後に、後宮牧師がマタイ福音書16章13-14節から説教された。天幕伝道集会を終えて数日後に、城陽市の平居家で家庭集会を担当する。マタイ福音書5章13-16節をテキストにして、「地の塩、世の光」について話した。参加者は平居夫妻をはじめ

め近所の方や教会員を合わせて10名ほどで、講話にたいして積極的に意見を述べて下さった。

8月28日(日)に初めて礼拝説教を担当する。この日はKが来てくれたので、彼と枚方市駅で待ち合わせをして、早い目に教会に着いた。説教はピリピ書3章13-14節をテキストに「目標を目指して」をタイトルとした。壇上に上がると、高杉先生や退院間もない小原先生、幼稚園の宮川先生、神学部の緒方先生夫妻、同志社香里高校の大橋先生などの真剣な顔が見える。30分余りの説教をして礼拝が終わる。司会者から「夏期伝道師、ご苦労様でした」と紹介された。出席者はそれぞれに説教に対する感想を述べて下さり、別れの挨拶を交わした。青年会のみんなとは小原先生を交えてゆっくりと話をする。それから、Kと大阪のデパートでゆっくりしてから帰った。神学生として良い経験を積ませていただいた3か月だった。9月になると神学部事務局へ行き、洛南教会における夏期伝道師としての活動報告をした。その時に、「来年度は派遣神学生を希望します」と伝えておいた。

*

香里教会のよるだん会は1977年4月に担当者が大学3年生になった菅義嗣君・藤本麻奈さん・長山のぞみさん、2年生の小西正哲君に一新した。その中に本人の希望により、Kが会計として加わる。彼は1975年9月から礼拝に出席を始め、よるだん会への参加も続けていた。おそらく病気のため人となじめなかったKに明らかな変化がみられたのは、この年の春だった。病気の回復も順調で、「退院の日も近そうや!」と喜んでいた。本人の希望とみんなのサポートを確認して、よるだん会会計を担当してもらった。

月に1回開かれていた枚方集会には毎回参加した。5月10日と6月5日にはヨブ記をテキストにして講話も担当する。その頃には集会参加者も増え、20名に近づいていた。中心にはいつも赤木武次さんがおられ、集会の発展を何よりの楽しみにしておられた。安原富美さんは「いつの日か、枚方集会が教会に発展できますように」と口にしておられた。

教会学校では青年科(中学生・高校生)の教師を続けていたが、分級を持つことはできなかった。粟飯原先生と山田先生、それに新しく加わった藤本さんと野口雅彦君が分級を担当する。それでも8月に由良キャンプ場で開かれた青年科夏期キャンプに



由良村夏期キャンプ集合写真（1977年8月）

は参加し、主題講演（テキスト：イザヤ書53章4節、タイトル：君の笑顔の向こうにある悲しみ）を行った。

(2)

後期に入ると、本行健三さんとよく帰った。丸太町教会まで一緒に行き、それから京阪三条まで一人で歩く。本行さんは訥弁で多くを語られないが、誠実な人柄がにじみ出ている。

本行 入院している父親は癌なんです。

塩野 心配ですね。

本行 これまでは学部を終えたら大学院への進学を希望していたけれども、断念しました。

塩野 残念です。

本行 来年3月には北海道へ帰ります。でも、勉強は続けるつもりです。

塩野 ぜひ、続けてください。忍耐がいるでしょう。でも、取り組み続けてください。

土肥ゼミで本行さんが沢茂吉について発表された日も帰りは一緒だった。

- 塩野 沢茂吉の発表は、フロンティア精神の持ち主という点が興味深かったです。
- 本行 土肥先生はアメリカ・キリスト教史から説明されていましたね。
- 塩野 西部開拓期にメソジスト派とバプテスト派はフロンティア精神で活動地域を広げたが、会衆派はだめだった。
- 本行 あの時に、「会衆派は権力と結びついたことによってフロンティア精神を失った」という指摘が重要だと思う。
- 塩野 日本のキリスト教もフロンティア精神だけは大切にしたいですね。

松隈隆子さんと大学で会う機会は少なくなっていた。しかし、出会うと親しく話をした。

- 松隈 天満教会で仕事をするようになって、進路について疑問を持つようになったの。
- 塩野 僕は神学生で立場が違うけれども、疑問ってよく分からないな。
- 松隈 教会員だったり神学生だった時は、無償で奉仕できてよかった。
- 塩野 伝道師の仕事って無償の奉仕の延長だと思うんだけど、違うのかな。
- 松隈 そうじゃないのよ。牧師の仕事にも世俗的なものが付きまとうの。世俗的な世界と切り離して、教会の仕事ってできないのよ。
- 塩野 そんなものかな。
- 松隈 教会の仕事に世俗的なものが絡んでくると、自分が高慢になってしまいそうでいやなの。教会の仕事に私は向いていないんじゃないかと悩んでいるの。

松隈隆子さんに「お茶会があるの。一日だけ授業を休んで、参加してくれない」と誘われた。11月だった。大徳寺の支院で行われたお茶会には松隈夫妻と天満教会の女性会員、それに私が参加した。松隈隆子さんのお手前でお抹茶をいただいてから、4人で女性の駆け込み寺、直指庵を訪ねる。玄関の前で草を引いておられたのが、考えてみると庵主の広瀬善順尼だった。尼僧の「ゆっくりしておいでやす」というお誘いに、4人は直指庵に上がらせていただき驚いた。助けを求めて直指庵を訪ねた女性たちの手紙が、何通も置かれていたからである。その時求めた2冊の本、広瀬善順『こころの灯』、『続 こころの灯』は心を揺さぶらずにおかない内容に充ちていた。



右から松隈隆子，塩野和夫，天満教会の女性会員
お茶会の後で（1977年11月，大徳寺の支院）

*

よるだん会の研修会を10月9-10日に香里教会で行った。天満教会から松隈正徳伝道師・隆子夫妻と中川憲次さん（現在，福岡女学院大学教授）が駆けつけて下さる。9日にピリピ書4章4節をテキストにして、「いつも喜んでいなさい」と題して話した。松隈正徳さんはガラテヤ書5章1，10-11節をテキストに青年と信仰について話された。10日には中川さんが伝道の書3章10-11節をテキストにして，青年の失敗・挫折・誤解と信仰について様々な観点から話される。松隈隆子さんは創世記3章8-9節にある「あなたはどこにいるのか」から，シモーン・ヴェイユを手掛かりにして話された。4人の講話を受けて，池田義晴さんや金澤宏彰君などの参加者による話し合いが盛り上がった。

10月中旬に神学部事務室から呼び出される。9月上旬に申し出ていた希望に対する返答だった。

塩野さんの1978年度派遣神学生に関する申し出に対して，村山盛敦牧師の豊中教会を紹介します。念のため断っておきますが，これはあくまで紹介で決定ではありません。今後は塩野さんが村山牧師と連絡を取り，話し合って決めてください。

自分から申し出ていた希望ではあった。しかし、具体的な提案を受けると迷いが生じた。何よりも、中学3年生の6月以来10年間通っていた香里教会との関わりに対して判断しかねる思いが強かった。いずれにしても連絡を取っておく必要はある。豊中教会の村山牧師に電話して「香里教会の了解」を理由にして、返事をしばらく待ってもらった。

思案していてふっと思いついたのが、10年間の総括として仲間を招く企画だった。会場としては自宅の算盤教室を使い、誕生日の11月2日に「25ばんめの秋」と題して仲間が集まる。急な呼びかけだったが、当日は30名を越える参加者があった。1部は燭火礼拝で、プログラムは次の通りである。



「25ばんめの秋」表紙

| | | | |
|---------|---|-----------------|-------|
| 黙 | 禱 | | |
| 点 | 火 | 「さあ行こう、仲間たち」 | 全員で朗読 |
| 集いの感謝 | | | 塩野 |
| 歌 | | 我が友よ (瀬野勇作) | 全員 |
| 聖 | 書 | マルコ福音書10章46-52節 | |
| 黙 | 想 | メッセージ | 塩野 |
| とりなしの祈り | | | 塩野 |
| 歌 | | 我が友よ | 全員 |
| 分かち合い | | | |
| 消 | 火 | 「さあ行こう、仲間たち」 | 全員で朗読 |
| 黙 | 想 | | |

第2部は食事会で、しばらくすると前方に設けていた舞台で出し物が始まる。フォークソングが続く中で、立ちあがられたのは安原富実さんだった。この日は和服の彼女が「故郷岡山県の盆踊りです」と紹介してから、踊り始められた。柔らかな身のこなしに所狭しと踊り終わられると、「ブラボー！」という声とともに会場から拍手喝さいが起こった。この日一番のサプライズだった。



「25ばんめの秋」 集合写真 1977年11月

12月中旬に、渡辺孝治さんから「久しぶりに下宿に来ないか」と誘われる。向かう途中、三条通にあった洋菓子屋の前で「僕は時々この店に寄るんだ」と言って、入って行かれた。お茶請けを求めて下宿に着くと、渡辺さんから切り出された。

渡辺 松隈君から聞いたんだけど、来年4月からの進路のことで塩野君は迷っているようだね。

塩野 そうなんです。派遣神学生として豊中教会へ行くべきか、香里教会に留まるべきか、判断しかねています。

渡辺 迷う時はね、壁に沿ってしばらく歩くんだ。そして一度決断したら、後ろは振り返らない。

塩野 その通りだと思います。迷う時は、迷うだけ迷ったらいいと思います。ただし、「こうだ」と決めたら、振り向かない。判断が鈍りますから。

渡辺 それからね、塩野君。努力していると、必ず迷いは生じるものなんだよ。今の塩野君の迷いも、僕から見れば努力あってこそその迷いだと思うな。

塩野 そのように見ていただいて、ありがたいと思います。

渡辺 もう一つ、言っておきたいことがある。「良い人は暗闇を歩いても、道を踏み外さない」ということだよ。塩野君はきっと大丈夫だ。



写真 凧揚げ大会 集合写真 1978年1月3日

1978（昭和53）年1月3日、恒例の「新春凧揚げ大会」のため朝から香里教会に集まる。1部は礼拝でマタイ福音書7章7-12節をテキストにして「フロンティアスピリット」と題して説教を試みた。それから凧作りである。竹ひごに和紙を張り、それぞれに手製の凧を作る。この年は同志社凧を作った。昼食を終えると、みんなで枚方市立第2中学校のグラウンドへ行く。思い思いの凧が舞う中を同志社凧も上がっていった。教会で片づけを終えてから、招いて下さっていた樋口家へ出かける。先輩の教会青年が何人もおられた。誰からどのように聞いていたのか知らないが、私の進路も話題になる。実は年末に1978年度には派遣神学生として豊中教会へ行く希望を杉田牧師に伝えていた。次のような意見があった。

樋口恭夫 香里教会に留まる必要はない。なるべく田舎の教会へ行行って、しっかり学んでほしい。牧師を目指す以上、プロであってほしい。

清水正憲 今は香里教会に留まったほうがよい。大里先生の20年間、杉田牧師の7年間を教会史として書き留めることができるのは塩野しかない。それを上げると、必ず塩野のためにもなる。

池田義晴 香里教会は出たほうが塩野君のためになる。新しい場でしっかりと学ぶことが大切だと思う。

安達英行 塩野のためには新しい場で学ぶことだと思う。

上野孝一 「出た方がいい」と言えればかっちは良い。しかし、そんなことをしたら香里教会はどうなる。よるだん会も教会学校の青年科も大黒柱を失うことになる。俺は正直言って、「残ってもらわないと困る」と思っている。

寝屋川十字の園へ礼拝説教をするため1月6日に出かけた。事務室で待っている間、施設長の内本栄一さんが対応してくださる。「キリスト教の施設と知って、キリスト教関係者で入所される方が多い。そのため礼拝も充実している」と伺う。少し早い目に部屋を出て、2階の集会室で待つことにした。車いすや歩行器に体を預けるようにして来られた方々20名余りで満席になる。礼拝ではみんなで「主、我を愛す」を歌い、創世記50章19-21節をテキストにして、「主はそれを良きに変えて下さった」と題して説教する。充実した礼拝だった。礼拝の間、ひときわ目立っていたのが前列中央のテーブルで左端に座っている男性だった。真剣で鋭い目つきをしておられ、彼の存在が会場を引き締めている。終わってから内本さんに尋ねると、その方は「松山高吉の息子で、松山到芳という絵描き」だった。それから礼拝に出かけるたびに到芳さんは同じ席に座っていて、鋭い目つきで参加しておられた。



寝屋川十字の園での礼拝 1978年1月

1月中旬に検尿検査悪化のため、「自宅安静」を指示される。このような結果が出ることは、予想していなかった。しかし、指示を受け入れるしかない。自宅に帰ると検査結果を正直に両親に報告した。2年半ぶりに昼間は母屋のベッドで休み、夜は小屋に帰る生活に戻る。東九条から帰った時との違いは、弟が両親の仕事を手伝うようになっていたことである。病床に伏した当初は寂しさに襲われた。柔道部の同級生で高校生になってから結核で入退院を繰り返し、20歳で自殺した仲間がいる。なぜか、彼のさみしさが思われた。しばらくするとモーツアルトのピアノ協奏曲を聞き、レオ＝レオニの作品を眺めて思った。「ゆっくりと音楽を聴き、絵本を楽しめるのは病気のおかげだ。悪いことばかりではない。前向きに考えよう」。2月3日になって、渡辺孝治さんと松隈正徳さんがお見舞いに来て下さる。「修士課程に入ってから、塩野君はよく勉強をしていた。それに昨年暮れからは進路をめぐるストレスがあった。この度の悪化は、身体が正直に黄色信号を出したのだと思う。春に備えて、今はゆっくり休んでほしい」。3月4日にはKがやって来て、「真っ暗や！」と大きな声で言う。最後に「予定されていた退院はできなくなり、毎週1泊2日の入院を続けることになった」と報告して帰って行った。見送りながら、「無理もない」と思う。わずか1か月半の病床生活でも「暗く、長く、つらい」。それに比べてKの場合は入院生活が10年にもなる。心待ちにしていた退院ができなくなれば、「真っ暗や！」と思いたくもなるだろう。その時はKの病状悪化に私の進路が関係しているとは想像もできなかった。3月の検査結果が落ち着いていたので、少しずつ日常生活を戻していくことにする。その矢先、3月18日に池田義晴さんがKのお兄さんとお見舞いに来て下さる。2人は同志社香里高校で同級生だった。「同志社香里高校を卒業すると、歯科医になるため勉強に打ち込んできた。それで身近にいる弟の世話をしやれなかった」と語られるお兄さんの言葉には苦悩が溢れていた。ところが、池田さんから意外な意見を聞く。「塩野君は誰に対しても良い人であろうとする。しかし、自分の道を歩もうとすれば誰に対しても良い人であることはできない。そのような場合、迷うことなく自分の道を行けばよいのだ。池田さんの言葉にハッとさせられた。お兄さんのお見舞いは「Kと再会してから7年間へのお礼」であり、「塩野さんが豊中教会に行かれたら、これからは家族で弟を見守っていく。だから弟のことで何も心配されることはない」という意思表示だった。それに対して池田さんも「Kのことは心配しないで、豊中教会で勉強すればよい」と応援してくださっていたのだ。

早速、よるだん会の責任者数名に集合をかけて小西家に集ってもらい、Kの事情を説明した。その上で、「彼のことをよろしく頼む」と頭を下げた。香里教会にも足を運び、杉田牧師にKへの配慮を「くれぐれもよろしく」とお願いした。

(3)

1978(昭和53)年4月には大学院へ復帰できた。ただし直前に2か月の病床生活を余儀なくされていたので、この年度は修士論文の執筆に専念する³⁾。

野本真也先生は初年度にドイツ語文献の精読に加えて、「論文の個性を生み出すのは動機であり、執筆中に繰り返し立ち戻るのも動機だから」と言って、論文執筆の動機を詳しく書くように指導された。2年目の春にはヘブル語原典の翻訳と並行して、「研究史の整理」を求められる。日本語・英語・ドイツ語の聖書を参考にしながら詩篇第42・43篇を翻訳し、先行研究を読み返して研究史をまとめるために前期は没頭した⁴⁾。その頃、よく話しあったのが戸田義孝君である。戸田は東京外国語大学でドイツ語を学んでから、同志社大学神学部に来ていた。同志社教会に出席していたので話題も共有できた。京阪電車の伏見稲荷駅の近くにあった下宿うずら荘を訪ねたのは5月23日である。戸田はゴッホを語り、井上陽水を論じ、彼らを引き合いに出して強調した。

人間はぎりぎりのところに置かれる。それは一見、異常とも見える。しかし、そういう所を通ることによって人間は神と出会う。

3) 「図書カード」によると、1978年度に読んだ本は次の通りである。

i) 祈り・説教 小野一郎『祈りの生活』、関山和夫『説教の歴史』

ii) 組織神学 F.アルメン『聖餐論』、バルト・クルマン『洗礼とは何か』、J.エレミアス『イエスの聖餐の言葉』

iii) 実践神学 鮫島盛隆『赤沢元造』、倉田俊丸『釘宮辰夫伝－祈りに生きた伝道者の生涯』

iv) 宗教と社会 曾我量深『本願に生きる』、加藤耕山『大乘禅』

v) 人生論 岡真史『ぼくは12歳』、岡百合子編『大空に舞った少年よ』、高史明『一粒の涙を抱きて－歎異抄との出会い－』、沢村貞子『私の浅草』

4) 参考、塩野和夫「聖書との出会い－苦悩の道を迎える－」(『キリストにある真実を求めて－出会い・教会・人間像－』41-140頁)

浄土宗のお寺に生まれ、毎朝の読経で鍛えられた戸田の声には力があった。帰り際の会話である。

戸田 神は何もかも奪い取っていかれる。しかし、そこでこそ神の恵みがかかるんだ。

塩野 戸田は泣いたか。

戸田 もちろん、泣いたさ。

うずら荘を後にしてからも、強烈な言葉は心に響き続けた。「戸田の経験は宗教改革者のルターにも、実存主義者キルケゴールにも似ている」と思った。しかしその時は、まさか自分が涙なくして通りようのない道を歩むことになるとは考えもしなかった。

4月から派遣神学生として日本キリスト教団豊中教会に通い始める。最初の集会は4月2日(水)の柏木大観⁵⁾さんによる祈祷会で、1階の和室で行われた。祈祷会の開始と共に、担当者の声が集会室に響く。

キリスト教に日本は禅で貢献できる。

禅で心を空しくするとは、自分が無になることである。前の障子に自分が見えてくるまで自らを無にする。

それから座布団を二つに折って足の組方を説明し、障子に向かって禅を組むことを求められた。両足を組んで座り、黙想する参会者に柏木の声が響いてきた。

しもべは聴きます。

祈りとは主の声を聴くことである。

そのために心を空しくする。

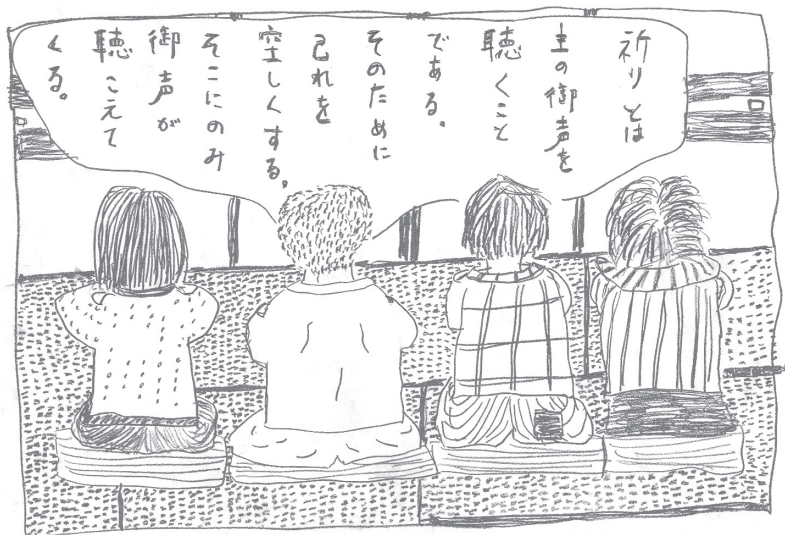
そこにのみ、御声は聴こえてくる。

「愛さねば」と思う心には反動がある。

空しくした心が、主に押し出されておのずと愛する。

そこに愛がある。

5) 参照、塩野和夫「大きな心」(『一人の人間に』65-66頁)



豊中教会の祈祷会（1978年4月）

6月中旬によるだん会の菅義嗣君から連絡が入る。「Kが1か月くらいで教会に来なくなった。入院しているらしい」という内容である。菅・藤本・小西正哲・小西裕亮と塩野が小西家に集まった。土曜日の夕方だった。

塩野 Kのことは杉田牧師にもよくよくお願いをしておいたが、……？

藤本 この件で杉田先生とは一切話をしていません。

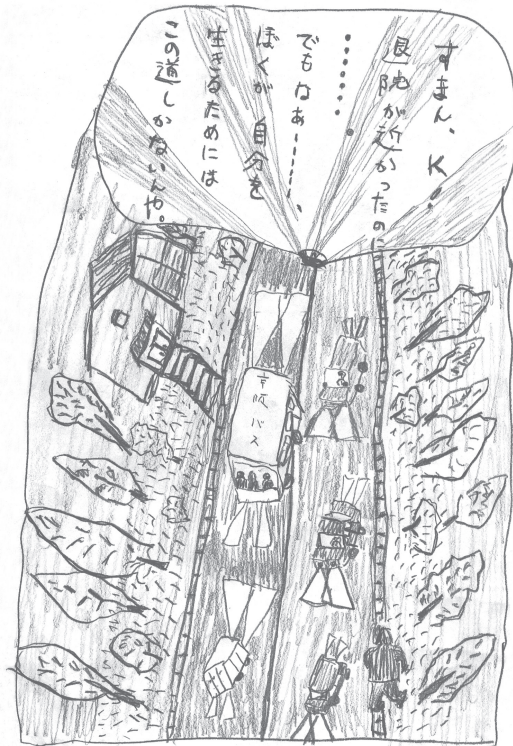
塩野 それにしても、1か月で病状が悪化するとは考えていなかったな。

菅 塩野さんから言われてましたから、気を付けていたんです。

正哲 けれども、塩野のお兄ちゃんの代わりは誰にもできひん。

裕亮 みんな分かってるんや。塩野先生が豊中教会に行ったから、Kさんは香里教会に来なくなった。でも、塩野のお兄ちゃんにはお兄ちゃんの事情がある。そうやから、みんな何も言われへんのや。

塩野 そうやな、……。本当にむづかしい問題や。



禁野の坂を上る 1978年6月

一人で小西家を後にすると、京阪電車香里園駅の洗面所に直行した。涙の滲んだ顔を洗うためである。枚方市駅から自宅まで歩いて帰る途中、豊中教会の派遣神学生を引き受けたこと、今回のKの病気との関わりについて考え続けた。けれども、いくら考えても答は出ない。真っ暗な禁野の坂を上った時には一人だったので、声にならない声を出すしかなかった。

すまん、K。

退院が近かったのに、……。

でもなあ……，

ぼくが自分を生きていくためには，

この道を行くしかないんや。

使命と信じた道を歩む。しかし、そのために一人の友人に与えてしまった衝撃の大きさに泣くしかない帰り道だった。翌日は日曜日で、豊中教会まで出かける。しかし、体調不良のため起きていることができず、一日中牧師館で休ませてもらった。

*

豊中教会の教会学校は小高科（小学生４・５・６年生）に所属し、分級は西村千里先生と小学６年生を受け持った。２階の集会室で行われた小高科の礼拝では、ほぼ毎週説教を担当する。７月２５日から２７日にかけて関西学院の千刈キャンプ場で行われた夏期キャンプでは、２日目夜のキャンプファイヤーを担当した。燃え尽きていく炎を見ながら、「温かい心って何だろう」と話しかけた。

大里喜三先生が亡くなられた時、ある女学院の生徒たちが心を込めて「天国にいる大里先生へ」という文集をまとめます。その中にある女の子が書いていました。

大里先生が毎週毎週私たちのために来て下さった。
でも、いじめられていじめられて育った私は、
優しい大里先生のお話を信じるができなかった。

ある日突然、彼女は「大里先生が亡くなられた」と聞きます。

なぜ、先生は天国へ行かれたのですか?!

今、ようやく先生を信じるできるようになった私を残して、……。

いじめられていじめられて育った女の子には、大里先生の優しさが分からない。だから、先生を信じることもできなかった。それでも、大里先生は毎週毎週来られて温かい心で接してくださる。その時、彼女の心は少しずつ信じる心へと開かれていた。だから、「温かい心って何だろう」という問いは、「温かい心の人と出会ったことがありますか」という問いになります。



教会学校夏期キャンプ 集合写真
(1978年7月, 千刈キャンプ場)



青年会ハイキング 集合写真 (1978年5月 六甲)

キャンプファイヤーの時に、生徒は話をしている間だけ静かに聞いていた。ところが、話が終わるとたちまちにぎやかになる。そのような生徒たちと向きあうためには、柔軟でなければ務まらないと教えられた。

神学生としてもう一つ所属したグループがあった。青年会である。教会の礼拝が終わると、青年会のメンバーはぼつりぼつりと1階の和室に集まってくる。予定されているプログラムは何もない。それでも集まると、みんなで話が弾む。同志社大学神学部の村山盛葦君と関西学院大学神学部の八谷俊久君も神学生として所属していた。青年会の主たる担当者は村山君で、塩野が側面からサポートした。5月5日には六甲へハイキングに出かけ、天満教会の中川憲次神学生も参加した。

豊中教会では聖日礼拝の礼拝を3回担当した。そのうちの2回は次の通りである。

8月27日

聖書：申命記8章1-10節

説教題：「主の口から出るすべての言葉」

10月第2週（献身者奨励礼拝）

聖書：ヨハネ福音書21章15-19節

説教題：「わたしを愛するか」

豊中教会の礼拝出席者は150名くらいだった。説教台に立つと、一人ひとりの顔がよく見える。参加者は、みなさん真剣に耳を傾けておられる。良い勉強になった。

9月10日の礼拝後に聖餐式をめぐるディスカッションが行われ、パネリストとして参加する。その頃、豊中教会の聖餐式はオープン（未受洗者も聖餐式に参加できる）だった。そこで聖餐式をめぐるオープンに賛成する立場の主張を村山牧師と内田政秀先生（関西学院大学神学部教授）が、反対する立場の主張を私が紹介した。議論は平行線で、深めることはむつかしかった。

修士論文は遅々として進まなかった。詩篇第42・43篇の翻訳に続いて、ヘブル語原典の分析をしなければならない。単語・語根・文章の構成と順々に分析を試みた。ところが、来る日も来る日も分析に取り組んでいるのに、一向に終わりが見えない。果てしない作業に夏はあつという間に過ぎ去っていった。秋になると、バウマンの仮説に従って、伝承史の考察を行う。この作業も複雑で、最終章の「神学的考察」に入ったのは12月半ばだった。なんとか間に合わせた原稿を揃え、コピーを事務室に提出したのは12月下旬である。しかし、それから修正作業は続いた。

*

野本ゼミで修士論文の発表を行ったのは1979（昭和54）年1月29日、野本先生のお宅だった。この日も私の修士論文をめぐる議論が弾んだ。読み込みをしないで聖書テキストから豊かに吸み取ること、何事においても内側と外側の論理を柔軟に総合的に考察することを野本先生からは学んだ。



野本ゼミ 集合写真 (1979年1月, 野本先生宅)

修士論文の提出に先立って、日本基督教団補強師の試験があった。応募するにあたって教会の推薦が必要になる。それを香里教会と豊中教会のどちらにお願いするのかという問題があった。いち早く事情を察して動いてくださる方がおられた。香里教会の宮本酷生さんである。彼は事前に役員を説得し、12月3日の香里教会役員会で塩野和夫神学生の推薦にこぎつけて下さった。香里教会のためにも私のためにも補強師試験の推薦は香里教会でよかった。教師検定試験の課題である説教は、アモス書5章9-12節をテキストにして「正義を知らず」と題して作った。3月4日には赤木武次さんをはじめ香里教会枚方集会の方々が集まってくださった。赤木さんからは「ひとつ私のできなかつたことをしてください」と印象に残る言葉をかけていただいた。なお、高校3年生から10年間続けていた小西家での家庭教師は、3月16日が最後となる。青春の思い出がいっぱい詰まった小西家である。

豊中教会のぶどうの会(既婚女性の集い)は「塩野神学生を囲んでお話を聞く会」を1月17日(水)に開いてくださる。神学生になるまでと、なつてからのいきさつを紹介し、「神学生を育てる教会であってください」と結んだ。1月末の週報に、「ある青年会員の家族が東京へ転居される」と掲載されていた。その日、礼拝に出席しておられたお母さんと彼女に挨拶したところ、お宅へ招待された。お訪ねすると、彼女の演奏でドビシーの「水の反映」を聴かせていただいた。聴いたことのない不思議な曲だった。目の前に波の様様がさまざまに描き出されていく絵画的な音楽である。音



塩野和夫神学生送別会 香里教会有志 (1979年3月)



小西家の仲間 小西宅 (1979年3月)

の純粋性が強く記憶に残った。3月18日の訣別説教はマルコ福音書10章46-52節をテキストにして、「イエスにしたがって行った」と題して説教する。

赴任先教会として当初紹介されていたのは、高知県の土佐教会だった。ところが、どのような事情があったのかは知らないが、直前になって滋賀県の大津教会に変更される。母親は転居にあたって、冷蔵庫や洗濯機など生活用品を整えてくれた。それらと共に3月末に枚方市から大津市に転居した。